意味への意志

V.E. フランクル著　山田邦男監訳　春秋社　2002

人間科学部教授　吉田 弘道

私が本書を読んだのは、大沢 博 監訳のもので、ブレーン出版から1979年に刊行されたものです。この本を1981年10月31日に読み終わったとのメモがあり、それは私が29歳の時でした。本書は、意志の治癒力、つまりロゴセラピーの本であるとともに、だれにでも役立つ、意志の力について書かれている本です。私は、同じ著者の作品である「夜と霧」、「死と愛」に続いて読んだのです。関連する本には他に同じ著者の「苦悩の存在論」（真行寺功訳、新版、新泉社、1998）があります。私はこの本を旧版で1977年に読んでいます。

意志の自由、意味への意志、人生の意味、というキーワードが本書の最初の部分に書かれていますが、私の記憶に残っているのは、生きることの意味は自分で見つけ出すことができる。意味を見つけ出す意志を持っていることが大切であり、その意志がなければ、意味があったとしてもその人は気付かない。反対に、意味を見出そうとする意志があれば、意味がないと思うところに意味を見つけ出して生きることができる、ということです。人は病気になって家族に大変な迷惑をかけるかもしれません。しかし、それでもその人が生きていることは、家族にとっては大切なことかもしれませんし、何もできなくても息をしていることだけで意味があることにその人自身が気づくことが大切なのです。

学生の皆さんは、まだ若いし、これからの人生です。おそらく、生きていることの意味は苦労しなくても見つけ出すことができるはずです。しかし、これからの人生において、どのような意味を自分自身に付与するか、あるいは意味を見つけ出し、より意義のある人生にするためには何をしたらよいかと迷った時に読むと良い本だと思います。

本書を読み始めると、最初は「難しい」と感じるかもしれませんが、そのうち、単純なことを言っているのであることに気づくはずです。今すぐでなくても、その気がわいた時に読んでみることをお勧めします。

二重らせん

ジェームス・D. ワトソン著
江上不二夫、中村桂子訳
講談社　1986（講談社文庫）

人間科学部准教授　岡村 陽子

この本は、スポーツやサークル、アルバイトには夢中になれても、勉強するなんてつまらないことだと思っているすべての学生に薦めたい本である。

今は当たり前のこととして知られている DNA の二重らせん構造は、ジェームズ・ワトソンとフランシス・クリックが 1953 年に明らかにしたもので、その功績により、ワトソンとクリックはウィルキンスとともに 1962 年にノーベル生理学・医学賞を受賞している。ノーベルウィナーであるワトソンが書いた本書は、DNA の構造をつきとめノーベル賞に一番近い所に立つまでの話ではあるが、研究の過程を学術的に解説してある本ではない。ノーベル賞の獲得レースにあの手この手を使い、多くの敵を出し抜いてなんとか勝ち抜くまでの物語であり、アカデミックな世界はなんて汚い世界なんだろうとがっかりするような逸話も満載で、見方によっては大学生活に幻滅してしまう危険すらある本である。けれども、オリンピックでゴールドメダルを獲得することを目指すように、研究の世界でもトップをとることというのはシビアだけれども一生をかける意味があり、勉強することは決してノルマをこなすような単調な作業ではなく、刺激的でスリルのあるチャレンジングな体験なのだということがひしひしと伝わってくる。そして、何よりもまだ若き研究者でもあるワトソンのケンブリッジでの研究生活が、真剣に研究に打ち込みながらもただただ求道的に勉強一色なのではなく、テニスをしたり、パーティに出かけたりと人生を謳歌している様子が何とも楽しそうで魅力的なのである。

ワトソンのように、とまでは言わなくても、毎日の生活を謳歌して、そして自分の目指せる最高の高みに到達できるよう全力を尽くして、一度しかない大学生活を楽しく有意義に過ごしてもらいたいと思う。